

令和3年2月10日(水) — 14日(日)

9時～17時（最終日は16時まで）●12日(金)は休館日 入場無料

福井市美術館

後援／福井新聞社 ウララコミュニケーションズ 福井県デザイナー協会
協力／黒龍酒造株式会社 株式会社バウス・デザイン スタジオ壹景

秀の間

樹の眼

西畠敏秀が目指す、日本文化に息づく「間合い」。

たとり直樹が見つめる、「幽玄」な枯淡の美の瞬景。
伝統と革新を繰り返す黒龍という酒蔵に対峙し、
表現への挑戦を続ける、ふたりの軌跡が呼応する。

黒龍に出会ったふたり、その挑戦のあゆみ。

たとり「写真家人生のターニング・ポイント」

黒龍と稻村先生のご縁

高校卒業後、商業写真界を目指して上京した。写真専門学校を卒業し、舞台や学校写真の代写業を経て、都内スタジオのアシスタントとして3年間勤務。1993年に独立し、当初は東京で開業した。

その時期、父の恩師である書家稻村雲洞先生を訪ねたご縁から、作品の複写や肖像撮影を承った。そのままの複写や肖像撮影を承った。そのとき、私はまだその名前しか知らなかつた。当時はフリーランスとして仕事に恵まれるも、手応えとしては納得できずにいた。そんな自分に、七代目蔵元は「お手並み拝見」という感じだった。撮影後、写真を見せても七代目蔵元の表情は変わらず。内面を見透かされたようで「これでは終われない」と奮奮した。黒龍の実直な酒造りにも感銘し、「お金はいらないから蔵に入れてほしい」と直訴。酒蔵の写真を、継続的に撮らせてもらった。2007年、撮りためた黒龍を題材に初の個展を開催した。足を運んでくださった七代目蔵元は「まだまだやな」と相変わらず厳しい口調だったが、その表情は喜んでくれているようだった。



2012年、妙心寺での奉納行事で揃って撮影された
稻村雲洞先生（左）と水野正人七代目蔵元（右）。
幽玄に導いてくれたふたりの師。

元もそのつながりに驚いていたようだつた。2016年、七代目蔵元と稻村先生は鬼籍に入られたが、おふたりとの出会いとご縁が私にもたらしたものには大きい。

七代目蔵元の慧眼に発奮

黒龍との出会いは、私の写真家人のターニングポイントとなつた。しかし、初めて黒龍の撮影を依頼されたとき、私はまだその名前しか知らなかつた。当時はフリーランスとして仕事に恵まれるも、手応えとしては納得できずにいた。そんな自分に、七代目蔵元は「お手並み拝見」という感じだった。撮影後、写真を見せても七代目蔵元の表情は変わらず。内面を見透かされたようで「これでは終われない」と奮奮した。黒龍の実直な酒造りにも感銘し、「お金はいらないから蔵に入れてほしい」と直訴。酒蔵の写真を、継続的に撮らせてもらった。2007年、撮りためた黒龍を題材に初の個展を開催した。足を運んでくださった七代目蔵元は「まだまだやな」と相変わらず厳しい口調だったが、その表情は喜んでくれているようだった。

故郷に「幽玄」を見る

今回の展覧会では、「幽玄」な枯淡の美を軸にしている。これは何年も酒蔵に通わせてもらっていたときから、自らの課題としているものだ。黒龍が、自分に「幽玄」を見出すチャンスをくれたと思っている。こんな風に福井の風景を記録するようになったのは、2004年、福井豪雨の被災がきっかけだ。当時の事務所が水に浸り、普段の風景が突如なくなつた。そこから撮り始めた福井の風景写真が、黒龍の広報誌がリニューアルした際、ディレクターの西畠氏によつて表紙に使われることになつた。故郷を記録する私の活動とともに



蒸米放冷。酒造りは「幽玄」の中にある。
それは神話の挿絵を見ているようであり、
「神=自然」からの賜物に思える。



「幽玄」なる枯淡の美そのものの福井の山河。
この自然からきれいな酒のめぐみがもたらされる。



たとり直樹　たとり　なおき

写真家、公益社団法人日本写真家协会会员
1968年勝山市出身。2003年の冬、季刊『福榮』編集長 坪川氏から
黒龍酒造の写真を依頼されると、慧眼の七代目蔵元に
「自身が納得できない写真の程度」と見透かされる。このことに発起、
また、黒龍の実直な酒造りに感銘を受け、継続取材を希望し、
入藏を許され現在に至る。今は八代目蔵元の厳しくも温かい指導のもと
納得できる写真が撮れている「今が一番幸福な」写真家。

“えたいのしれない”黒龍

春愁号 2007.5

和の文化を、一瓶で表現

「上質な普通」と新たな縁

1995年当時、福井県酒造組合連合会（現・水野直人会長、これも縁）の広報活動を手がけていた折に、名作コミック『夏子の酒』に登場する福井の「美泉」の卓越した吟醸酒は、黒龍だという説を各方面から聞く。自分がお酒を嗜まないこともあり、日本酒を知る人から熱く語られる地元の黒龍に、『えたいのしれない』を感じていた。

また同時に、懇意にしていた福井大学の工芸家の先生から、黒龍「火いら寿」（火いら寿）が日本酒の頂点！と教えられる。



そして2003年、なんと、黒龍酒造よりその「火いら寿」のパッケージデザインの相談を受けることになる。2005年に八代目蔵元となつた水野直人氏は、水野正人七代目蔵元の構想を継承すべく、初の試みとなる大吟醸燗酒「九頭龍」を世に出す。その一連のディレクションを担いながら、広報誌「永」の発行が始まる。10年間は、七代目蔵元の美意識に基づき、酒蔵の歴史と文化を表紙で表現した。11年目の21号以降は、たどり氏による「後世に残したい福井の風景」を、黒龍酒造の志として展開し、現在も続けている。

何んまいが何より雄弁な広告にしたい。直感的にそう思った私は、最初に日本建築の中に息づくモダンな和の文化をイメージした。かつて建築家ブルーノ・タウトが、桂離宮の洗練された和のデザインに魅せられたように。垂直水平の柱と梁、障子や襖、畳の持つ簡潔で静寂な和の文化を、黒龍らしさの象徴として新聞広告で表現できないかと試みた。「畳の上に、酒瓶がひとつだけある」。ありえないほどシンプルで大胆なデザインの提案を、驚いたことに蔵元はいとも簡単に承諾をされた。

指針であり、大学の授業でも20年近く開講してきた。そんなある日、「深澤氏が黒龍のオリジナルのグラスをつくってくれた」と、八代目蔵元から聞き驚いた。そして蔵元の提案で、この機会に福井に足を運んでいただき、地元のクリエイターとの交流会や公開講座を開いてもらひうことになった。リスクをしてきた人と、黒龍を介して交流ができるとは、難解な方程式の答えとしては、できすぎのような出来事。女性の手のひらで転がるような、というグラスを、たどり氏に水に浮かぶように撮影してもらい、ポスターが仕上がった。

黒龍酒造は、1804年（文化元年）に創業。その歴史は、変わらないために変わり続ける軌跡でもあった。そんな黒龍が、2008年、八代目蔵元の主導のもと、紋を刻印した独自の720mlボトルを開発。年末のご挨拶以外はほとんど広告をしない黒龍が、新聞広告を掲載するという。質素で自らを多く語らず、かつ



西畠がデザインの指針とする「上質な普通」。それを提唱するプロダクトデザイナー深澤直人氏がデザインした酒杯のポスター。

プロダクトデザイナーの深澤直人氏は、私が大きな影響を受けたクリエイターのひとりだ。彼が提唱する「上質な普通」は、私にとって重要な表現の

西畠 「仕事でありながら、ライフワーク」



西畠 敏秀 にしばた としひで

デザインディレクター、仁愛女子短期大学グラフィックデザイン担当教授

1958年丸岡町出身。1995年頃、福井大学教育学部教授で工芸家の故 鈴木朝生氏より、黒龍「火いら寿」とその蔵陶を受ける。

翌年には、国内初の大吟醸燗酒「九頭龍」と燗道具「燗たのし」の発売に参画。VI計画等ブランディングコミュニケーション活動に携わる。

黒龍に出会つたふたり、その挑戦のあゆみ。

温故革新。

仁愛女子短期大学教授でありデザインディレクターとしても活動する西畠敏秀と、

広告写真などを手がけながら故郷福井を記録する写真家たと/or直樹が、これまで携わってきた黒龍酒造のクリエイティブを振り返る二人展です。

情報誌「永」、新聞広告、ポスターなどの作品や数多くの写真には、西畠が目指してやまない日本文化の“上質な普通”に息づく「間合い」と、

たどりの眼差しが追い求める時が止まつたような「幽玄」の瞬景が宿っています。

文化元年（1804）の創業以来、伝統と革新を繰り返してきた黒龍酒造という“えたいのしれない”存在に出会い、仕事の領域を超えたライフケースとして表現への挑戦を続ける、ふたりの軌跡が呼応する展覧会です。



「黒龍」は九頭竜川の別名。
急流としても有名だが、ところどころ時間が止まつたような場所がある。



蒸気に包まれる釜場。
外の光が差し込む数少ない作業場。
晴天時に見られる幻想的な世界。



「天空に登る龍」

お酒を飲んでの御断は法律で禁じられています。お酒は20歳になってから。

切り絵作家の藤城清治氏が、松岡の石田屋をスケッチされたのを縁に、図案を制作していただいた。
2011年12月に掲載された新聞広告は、ずっと統一している図デザイン。



本社石田屋玄関。格子戸と笏谷石の併まいが
200年を超える歴史を想わせる。牡丹雪が似合う藍暖簾。

黒龍酒造株式会社
八代目蔵元
水野直人

この度は、おふたりの展覧会が無事に

開催の運びとなりましたこと、心よりお慶び申し上げます。
弊蔵への挑戦が一つのテーマとなつておりますが、
これには私の父に対する想いと通じるところがございます。

酒造りへの妥協を許さぬ姿勢、

品質へのこだわりやパッケージデザイン。

お客様の喜ぶ姿を想い貫いた父の思想は、
黒龍酒造に残されたかけがえのない財産です。

しかしながら、未曾有の国難に見舞われている
今が証明するように、時代に合わせた進化を遂げなければ、
お客様の喜ぶ顔に出会い続けることはできないでしょ。

黒龍酒造だからできる。黒龍酒造にしかできない。
そんな革新的な取り組みの積み重ねが、
新しい地酒を創っていくと信じ、
新時代に向けて歩んで参ります。

樹秀の間
の眼

令和3年 2月10日(水)～14日(日)

9時～17時(最終日は16時まで) ◎12日(金)は休館日 入場無料

福井市美術館

918-8112 福井県福井市下馬3丁目1111
Tel.0776-33-2990 Fax.0776-33-3114
www.art.museum.city.fukui.jp/

後援／福井新聞社 ウララコミュニケーションズ 福井県デザイナー協会 協力／黒龍酒造株式会社 株式会社パウス・デザイン スタジオ壱景
Special Thanks / 武澤和代 蔡下喜行 坪川京子 稲村龍谷 川副景介 野尻昌明 中野勝巳 石田美和 黒田和彦 ハセガワヒロシ(敬称略)